

第17号



SDGsは集落からはじまる

小報もがみ

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性ほうせつせい
(※)のある社会を目指して国連が掲げた17の目標が
エス・ディー・ジーズ
SDGsです。内容はどれも素晴らしいし、実現したら
真の意味で平和な世の中になると思うのですが、「幅
広すぎて何から始めたら良いのか分からない」という
方も多いのではないのでしょうか。

でも、そのどれもが難しいことではなく、日常の視点
や、選択を少し変化させるだけで誰もが参加できるプ
ロジェクトです。「自分の子ども、孫たちが豊かな自然
の中で醜い争いに巻き込まれることなく平和に暮ら
し続けていくこと」に結びついていけばいいのだと私
は解釈しています。

ただし、そのためには社会全体を見ていく必要もあり
ます。どうしたら豊かな土壌を次世代に引き継げるの
か、土砂災害や獣害を防ぐためには、貧困や格差を無
くすには——。どれも時間がかかるし、すぐに結果が
出るものではないけれど、継続していくしか方法はあ
りません。

しかし、もうすでに最上町の中でSDGs的な取り組み
をしている集落がありました。向町の北東、花立峠に
向かう途中にある黒沢地区です。平成16年には独自に
「黒澤むらづくり計画書」を作成。持続可能な集落を
目指し、住民同士が話し合いを重ねていたのです。
主に農業と防災をメインに、国の交付金も上手に活用
し、無理なく楽しみも織り交ぜながら活動しています。

例えば遊休農地や管理が難しくなった家の畦畔の草刈
りなども「黒沢草刈り隊」を結成して行っており、地
区の美しい景観が保たれています。また、地区の運動
会を「黒沢防災大運動会」とし、予期せぬ災害に備え
て消火器の使い方、傷病人の担架での運び方など、お
年寄りから子どもまで、ゲーム感覚で身につけていま
す。東日本大震災が発生した際に黒沢地区が支援に駆
けつけた気仙沼市前浜地区との交流は今も続いていて、
その経験が住民の防災意識を高めているのだそうです。
毎年3月11日には震災と防災を忘れないために各家が
家の前にろうそくを灯す行事「不忘灯（わすれじのと
もしび）」が続けられています。こういった仕組みを
提案し、動かしてきた最上町広域協定事務局長の大場
晃さんが「むらづくりは内向きだとぶつかり合っ
てしまう。外向きだと方向が一方向だから、まとまりやす
いんだよね」と教えてくれました。震災で得たつな
がりや教訓が、黒沢地区をまとめるきっかけになっ
ているそうです。

他にも、最上祭りなどでもおなじみの「黒澤餅搗き
唄」は、江戸時代末期頃から続いていると言われる伝
統行事（時期については諸説あり）。黒沢のほとん
どの世帯が参加しているそうです。以前お祭りで見た
ことがあるのですが、黒沢の住民の仲の良さや信頼
関係が伝わってきました。この行事もまた、昔から
黒沢の人々を結びつけてきたのでしょう。

「誰か一人が一生懸命になっても、周りの人がついて
いけなければ意味がない。急ぎすぎないようにスピー
ド感を大切にしています」と大場さん。最初に書いた、
SDGsのコンセプトでもある『「誰一人取り残さな
い」持続可能で多様性と包摂性のある社会』は、黒
沢地区のような社会なのだろうなあと思えます。
他の集落がどのような取り組みをしているのか意外
と分からないもの。黒沢地区以外にも独自に工夫さ
れている地区もあると思います。大場さんは最上町
広域協定で持続可能な農業や農村の維持に加え、集
落間連携も活性化していきたいと語ります。
ひとつひとつの集落が集まって「町」がある。互
いの集落のよいところを学び合い、連携しながら
SDGsの11番目「住み続けられるまちづくりを」を
みんなで達成していきたいですね。

※包摂性=社会のすべての人に配慮を払い、誰一人
取り残さない

2021年4月21日発行

編集：最上町地域おこし協力隊 山崎香菜子
情報提供や山崎とお話したい方はご連絡ください
電話0233-43-2261（最上町役場まちづくり推進室）
メールhayakawamiyage@gmail.com